

く疱瘡（天然痘）は江戸時代に幾度となく流行を繰り返しました。家老岡本元朝の息子小藤次は十月二十二日の発熱により発症します。当時、藩医を務める臼井三折等の手当てによって症状は落ち着いたかに見えましたが・・・

【解説文】

○三折かげんの薬二三度用候て子ノ刻比少能静二候時、小藤次申候ハ刀と脇さし持来候へと申候間、きさ取出し為見候へは、手を出しさぐり候て枕本ニおき候へと申候てさし置、丑ノ刻ニ養生不叶死候也、我等当四月江戸より下り候時、刀を江戸にて拵持参候て小藤次二手より直ニとらせ候時、たわふれニ此刀と申候ハ手あそびニあらず武士ハいか様ニ落ふれ乞食体ニ成候とも、大小ハ身をはなさず枕ニ置候て死候を武士と申候、幼年ニも父がかく申候をわすれ候なと申聞候事を此時ニいたり思ひ出し、刀・わきさしとりよせさくり候而枕もとニおかせ死候事、子なから幼年ニ而志を感心いたしおしく存候也、今年五歳二候也、